

ミニシアターまる

「ごうたと山んば」

長く演じておられる作品だと聞きました。

1つの作品を長い時間をかけて、機会を積み重ねて、大切に育てておられることは、とても素敵なおことだと思います。24年前のまるさんと、今のまるさんでは、演じながら、そこにこめた思いはきっと違っているでしょうから。作品も中島さんと一緒に、育っていることでしょう。…と言っても、私は残念ながら初めて観たので、そのところは想像の域を出ないのですけど。

さて、「ごうたと山んば」。

まず、月並みですが、おもしろかったです。

そして、こわかった、かな。

とにかく、大変なインパクトを観た者に残す作品でした。

それは何より、ビジュアル的に、鮮烈に、です。

確かカゲアナで、まるさん自身が「ごうたのような子どもがいたらええな」という思いを語っておられましたね。

ごうたの勇気、友だちや村人を思うやさしさ、そして、恐ろしい人食い山んばを打ち負かす知恵。

そうですね。

私たちもそのように生きていけたら、うれしいものです。

ですが正直なところ、少なくとも私にとっては、そんなごうたの姿よりも、裂けた山んばの巨大な顔面が記憶に残っているのです。

それは2つのことを意味しているのだと思います。

1つは、山んばの造形がおもしろいということです。特に巨大なあの顔。あれは山んばの恐ろしさ、邪悪さが、ものすごくわかりやすく表現されていました。さらに裂ける顔の中から、食べられていた人たちがニュウッと飛び出してくるのも衝撃です。恐怖の表現として、非常に素敵なアイデアで、要するに「おもしろい」わけです。そのため、皮肉なことに、ごうたのことよりも、画としての山んばばかりが、記憶に刻まれてしまった、ということだと思います。

2つめは、ごうたという子どもの描かれ方です。どんなに勇気ある子どもでも、葛藤や恐れ、弱さがあるはず。だって人間なのですから。ごうたのそういった面がまったく描かれていないわけでもなかったのですが、伝わりにくかったように思います。弱さを抱えた人間が、勇気を振り絞る。その姿がもっとクッキリと描かれたなら、きっとまるさんが表現したいと考えるごうたという少年の魅力が、観客に届くのではないのでしょうか。

あと1つ。

私には、山んばが人を食う、ただただ恐ろしいだけの存在として描かれているのが気になるのです。

山んばはなぜ、あのように恐ろしい存在になってしまったのか。

生まれつきでしょうか。

異形の者が村人に迫害され、差別され、その怨嗟がもたらした結果なのかもしれない。

私は、そういったことも（「ことこそ」とは言いませんが）表現されるべきことではないかと感じるのです。そこにもドラマの深みが生まれる要素はあるのではないか。

照明の使い方はとても効果的でした。

一方で、音楽についてはやや機械音だなあという印象で、昔話の音楽としては少し残念な気がしました。

と、辛口のことばかり書いてみました。でもこれは、きっとこれからまるさんがこの作品を大切に演じ続け、今以上に素敵な作品に育てていかれるだろうと、期待を込めてのことですので、気を悪くしないでくださいね。

私は、あれだけの作品を一人で創造し、演じ切るまるさんに心からの尊敬を感じています。

これからのますますのご活躍を心から、楽しみにしています。

おもしろい人形劇を、ありがとうございました。

京都児童青少年演劇協会
中村さとし